

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□・□で、二十四ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

一

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

主人公のハルは、夏休み中に原因不明の脱毛症(髪の毛が抜ける病気)になってしまい、二学期からウィッグ(かつら)をつけて登校を始めた。そのため、人の目が気になってしかたがない。仲よし四人組のメンバーである、コッシー、セイラ、カナにも打ち明けられずにいた。ある日、セイラの家で四人が集まり、「ファッションショーごっこ」をしたときにウィッグがずれ、直そうとしているところをコッシーに見られてしまう。ハルは、恥ずかしさのあまりそのまま家に帰った。翌日、登校したが、コッシーはいつも通りに話しかけてくれない。セイラとカナは、ハルとコッシーがギクシャクしている事情が分からなかったが、ひとまずハルのところにコッシーを連れてきた。

「はい、連れて来たよ。どうして喧嘩しているのか話してください」

ねえ、とセイラはカナを見る。

「うちら四人組でしょ。秘密とかなしだよ。ゼーンぶ話して、仲直りしよう」

カナはにっこり笑う。完全に自分がものすごくいいことをしていると信じきっている表情。秘密とかなしって、ゼーンぶ話してって、そんなにカンタンに言わないでほしい。

① ハルは黙って俯いた。

「だって……」

コッシーの声。それで顔を上げる。コッシーはこちらをじっと見つめる。今朝、靴箱で会った時よりも鋭い目つきで。

「コッシー、何？」

セイラが先を促すと、コッシーはゆっくり瞬きした。大きな目が少し潤んでいるように見えた。

「ハルが、嘘をついたから」

「……そんな、ついてないよ」

ハルが言い返したら、コッシーの眉間の皺が深くなる。

そんな目で睨まないで。

胸を棒で強く突かれたように痛んだ。

「あんなこと、知らなかった。騙していたんでしょ、嘘をついているのと同じことだよ」

コッシーが声を荒らげると、セイラとカナまで不安そうな表情になる。

「嘘って、何のこと？」

カナがハルに訊く。

「ねえ、言つてよ」

セイラはコッシーに言った。

コッシーが言う「嘘」というのは、きっと

I

ということなのだろう。だけど、それは「嘘」じゃない。本当のことを言っていなかっただけで、騙していたつもりじゃない。言いたくても言えなかっただけなのに。

ハルとコッシーが押し黙っていると、セイラが大きなため息をつく。

「やってらんないよ。せっかく仲直りさせてあげようと思ってやってんのに、もう勝手にして」

「四人組だと思ってただけだな」

カナが悲しそうに呟いた。

何だっというのよ？ わたしが悪いって言いたいの？ 好きで秘密を作ったわけじゃない。わたしだって四人組だと思って

いた。友達なんだつたらもつとわたしの気持ちをわかってくれてもいいじゃん。悲しいという感情を通り越して、むかついてきた。

全部、禿げてしまったせいだ！ 何がウィッグだ！ いくらカタカナでおしゃれに言っても、禿げを隠すためのかつらってこと。こんなものを被らないといけないから、こんなふう^③に追いつめられることになって……何もかもが嫌になってきて、ハルは頭に手をやる。

全部をおしまいにしてしまいたいという感情と、少しくらい同情されたいという想^{おも}いがごちゃまぜになった、自分でもよくわからない気持ちで、被っていたウィッグを外した。

「やだっ」

小さく叫んだのは、セイラだった。

いったいどんな髪型になっているのだろう。セイラの口があぐりと開いた。ウィッグを外した後の髪型はものすごく変だから、そういう顔になるだろう。

「えっ……かつら？」

ワテンポ遅れて、カナのひっくり返った声。

「この間、セイラの家遊びに行った時に、コッシーにばれたの。騙していたつもりじゃない。言えなかっただけ。でも、嘘をついていたって思われるんだつたら、もうそれでいいよ」

ハルはコッシーを見る。

これでいいんでしょう？ 気が済んだ？ 目でそう伝えた。コッシーは口を一字に結んで、こちらを見ていた。

鏡がないところだとうまく被れないから、ハルはウィッグを手にしたまま教室を出てトイレに向かった。もったほうなかもしれない。だって二学期のシヨニチにはウィッグだとばれると思っていたのだから。

かわいいものが大好きな女子だから、もうわたしを仲間にはいれてくれないだろう。だって、禿げた女子はかわいくない。

かわいくない女子は仲良くしてもらえない。

〈中略〉

ハルとコッシーの関係は、相変わらずギクシャクしたままだったが、ハルはこのままコッシーとの関係を終わらせたくないと思い、勇気を出してコッシーに電話した。ハルが、「二人で会いたい」と伝えると、コッシーは会うことを約束してくれた。

はじめて見るピンクのコートを着ているのに、すぐにわかった。髪を二つに結った頭に白いベレー帽ぼうをのせていてかわいい。「急に電話してくるから、びっくりした」

歩きながら、コッシーが声をかけてくれる。電話の時よりも、いつもどおりでほっとする。

「ごめんね……なんか、どうしても」

そこで止めて、ハルは上目遣いうわづかで見た。どうしても、会って話したかった。そう言いたいのだと伝わったのか、コッシーは頷うなずいた。

「つていうか、めっちゃ、寒くない？」

首をすくめたコッシーに、だよね、とハルも同じようにすくめた。

「めっちゃ寒い……ごめん、児童館のほうがよかったかも」

「児童館って、28から休みじゃん？」

「そっか……だね、ごめん」

「さっきから、ごめんばっか」

コッシーが苦笑いする。あつごめん、とまた言ってしまうそうになって、ハルも苦笑いになった。

「でも……ごめんって言いたくて、それで、すっごい勇氣出して、電話して、それで」
言葉と言葉を不器用につなげながら、浅い呼吸を繰り返した。こんなふうにコッシーと **Ⅱ** と向かってしゃべるのが久しぶりすぎて、胸がいっぱいになってくる。

「なんで、ハルがごめんって言いたいの？」

素朴な疑問(注1)というトーンで訊かれる。なんでもって言われても、と思いながらも答えを探した。

「だってさ、わたしのウィックがばれちゃった時、変なタイドをとっちゃったでしょ。誰だれにも言わないでくれって言ったのも、悪かったなって。一方的に秘密を作らされて、コッシー、やだったよね」

ハルの言葉を聞いて、えー、とコッシーは驚いたように言う。

「何それ、待ってよ」

「えっ、違ちがう？」

「違うっていうかさ、そんなふうに言われたら困るっていうか……だって、はつきり言いって悪いの、あたしだし？」

「ううん、そんなこと……」

と言いかけたハルをさえぎって、あるって、とコッシーは首を横に振ふった。

「ハルの気持ち、わかるくせに、何ていうか」

「そんな……」

うまく言葉を返せなくなった。でも、ものすごく本音のところでは、嬉うれしかった。自分から謝うりたいと思って呼び出したけれど、コッシーからも同じような気持ちを返してほしいと、どこかで思っていたから。

「誰にも知られたくなかったんだよね？」

「……そうかな」

「わかるんだよ。でもさ、むずいよ」

「むずいって?」

「ハル、何もなかったような顔をしてほしいから、かつらを被っているわけじゃん? でもこっちとしては見ちゃったら、もう知らないふりなんて無理っていうか」

あつ、そういうことか。たしかに、そう言われると納得できた。

「だよね……やっぱり、ごめん」

そう口にしたハルに、もう、とコッシーは唇を尖らせる。

「ごめんって言うのなしだって」

「わかった、なしにする」

「あとさ、正直、けっこうむかついたのも、あるの。だ^⑦って、裏切られたって思ったもん」

「裏切られた?」

今度は思いがけないほど強い言葉が出てきて、心臓がぎゅっと縮^⑧んだ。

どうして、という思いで、ハルは向かい合う親友の表情をまじまじと見る。コッシーはわずかに拗^⑨ねるような顔になって手を口元に持っていくと、人差し指の爪^⑩を少し噛んだ。

「勝手な決めつけかもしれないけど、あたしとハル、セイラとカナっていう組み合わせだと思っていたから」

「わたしも、そう思ってたよ」

「だったらさ、あたしには真^⑪つ先に話してよ! 騙されたって思っちゃうよ」

コッシーの声があたりに響^⑫いた。迷いのない、まっすぐな声で、ハルはどう反応^⑬していいのかわからなくなる。気まづくなつてすぐの頃、コッシーに言われた言葉が蘇^⑭った。

——ハルが、嘘をついたから。

——あんなこと、知らなかった。騙^⑮していたんでしょ、嘘をついているのと同じことだよ。

それを向けられた時に胸に走った激痛の痕が、いまだに体の芯のほうに残っている。あまりにも苦しくて、悔しくて、なかば自棄やけになって、みんながいる教室でウィッグを外し取ったのだった。

コッシーの言いたいことはわかる。だけど……。思考停止しそうになった頭に、数秒遅れて、強情⑧な気持ちが雪崩なだれみたいに流れ込んできた。

でもでも、もしもコッシーがわたしだったら、わたしに話せた？ 髪の毛が抜けて禿げていく自分の姿を、友達に見せることができた？ 隠したでしょ？ 絶対に隠したでしょ？ なのに、そんなこと言うの？ あたしには言つてよつて責めるの？ 言えなかつたつて思わない？ 言わなかつたと言いつてしまふ？

感情が次々に言葉に交換かされて、喉元のどに湧わき上がってくる。今にも口から飛び出しそうになって、ハルは思わず口に手をやる。そして、かろうじて飲み込んだ。

コッシーと仲直りをしたい。そのために、ここにいる。

これまでずっと、かわいいもののお話ばかりしてきた。コッシーはかわいいものが大好きで、かわいいものが大好きなコッシーのことが大好きだった。

(注2) ラメの入ったボールペン、チョコの香りの消しゴム、モコモコのシール、水玉(注3)のシユシユ、レースのついた靴下。

ただでさえかわいくないのに、髪の毛がなくなってさらにかわいくなくなっていく自分のことを、どう話せばいいのかわからなかった。かわいいものが好きな親友に、かわいくなくてかわいそうだとも、かわいくないから嫌いだとも思われたいかなかった。

だから、言えなかつた。その気持ちを本当はわかつてほしかった。だけど、そこまで期待するのは違うのだろう。だってもしも自分がコッシーの立場なら、きつとそこまでわかれなかつたと思うから。

乾かわいた口の中のわずかな唾液だを喉のどの奥おくに押しやる。

そっか、お腹に溜ためるつてこういうことなんだ。

「……コッシーには言わなくちゃ、だよね」

ハルは精一杯の力を振り絞り、口角を上げて見せる。

「でしょ」

コッシーはすんなりと、優しい目で微笑んだ。

「言わなくっちゃって思ってたけど、なかなか言い出せなくて」

「あたしも、ほんとはもっと早く仲直りしたかった。みんなの前でハルが、そのう……かつらを外しちゃったのを見て、つらかった。一番つらいのはハルなんだけど」

ほんと、あたしってやなヤツだ、とコッシーは目を潤ませる。

^(注4)山際さんとかが登場しちゃったりして、ややこしくなったから

「まじむかついたよ。何なの、あの人ら」

「悪い人じゃないんだけど」

「いやいや、悪いでしょ。だってハルの味方するようなことを言って、けつきよく自分らをいい人みたいに見せたいだけなのがみえみえだし」

悪口モードに入ったコッシーに、まあね、とハルはやんわりと頷いておく。

「ねえ、いつからつけたの？」

「うんとね、二学期から」

「わかんなかった。髪型で雰囲気って変わるんだなって思ったけど。ここらへんがないんだっけ？」

記憶をたどるように、コッシーは自分のベレー帽の前あたりを手で触った。そう、とハルは頷いた。

「少しずつ髪の毛が抜けていったの。だんだん目立つようになってきたから、お母さんが被ったほうがいいって」

「なんで抜けちゃったの？」

「よくわかんないんだ」

「そっか。意味不明なことって、けっこうあるよね！」

意味不明という言葉がおかしくて、ハルは笑った。かわいそうではなく、そんなふうに戻してくれるコッシーが好きだ。お互いに謝り合って、仲直りできても、完全にもやもやがなくなることはない。それでもやつぱり、と思う。優しくてかわいい、この親友が好きなのだ。八十パーセントの甘い気持ちで、お腹の底に溜まるトロリとした苦々しさを薄めた。

「あるんだよ、そういう意味不明なこと」

きつとこれからもたくさんあるのだろう。

「あのさ、いつかあたしにも被らせて。面白がっているんじゃない。ほんとに被ってみたいの。ハル、似合ってるし、自分じゃない自分になれそうな気もするし……それに」

たしかに、そうかもしれない。ウィッグを着けるようになったこの数カ月、いつもの自分とは少し違う自分として生きていたような気がする。

「それに？」

「その髪型ってさ、明智光秀(注5)さまの妻の熙子(注6)の 코스프레 に良さそうなんだよね。夫のために自分の大事な髪を売った後のヴェイジューアルって、たぶんそういう髪型なんだ」

コッシーは照れたようににはにかんだ。

いつものことながらハルには明智光秀の妻の髪型のことなんてわからないけど、このウィッグを被ったコッシーの姿を思い浮かべ、大きく頷いた。

(注1) トーン…音や声の高低や調子。

(注2) ラメ…金銀の糸など、キラキラしたもの、またはそれらを縫い込んだもの。

(尾崎英子『竜になれ、馬になれ』)

(注3) シュシュ：薄い布にゴムを通し、髪などを結ぶもの。

(注4) 山際さん：同じクラスの、別のグループの人。ハルをグループに入れようとしたが、ハルはグループに入らなかつた。

(注5) 明智光秀：戦国時代の武士。コッシーは「レキジヨ(歴史が大好きな女性)」なので、話すときにも歴史上の人物を例に出すことが多い。

(注6) コスプレ：自分ではない何かに姿を変え、その人になりきること。

(注7) ヴィジュアル：外見。

問一 〓線 a) e) の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二 〓線 ①「ハルは黙って俯いた」とありますが、このときのハルの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本当にコッシーが自分のことを許してくれるかどうか、不安に思っている。

イ コッシーと仲直りしたいという気持ちはあるものの、なかなか素直すなおになれずにいる。

ウ セイラとカナが仲直りのチャンスを作ってくれたことに、心から感謝感謝している。

エ 「仲良し四人組の間では秘密はなし」という考え方を押し付けられて、戸惑とまどっている。

問三 〰️線㉞「促す」・㉟「声を荒らげる」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

㉞「促す」

- ア 自分の考えを強制する。
- イ 前に進むよう働きかける。
- ウ 責任を持って判断させる。
- エ 寄り添ってともに考える。

㉟「声を荒らげる」

- ア 必要以上に声を出す。
- イ 乱暴な言葉遣いをする。
- ウ ハキハキと話す。
- エ 八つ当たりする。

問四

I

に入る内容として適当なことを、本文中のことばを使って、解答欄に合うように、二十字以内で答えなさい。

問五

―線②「セイラが大きいため息をつく」とありますが、このときのセイラの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ハルが自分たちにうそをついていたと知り、がっかりしている。
- イ 自分たちを拒否するハルとコッシーに、すっかり嫌げがさしている。
- ウ いつまでも口をきこうとしないハルとコッシーにあきれかえっている。
- エ ハルとコッシーの言い分が食い違っていることに疑問を感じている。

問六

——線③「こんなふうに進いつめられることになって……」とありますが、この内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の望まないタイミングで、秘密を隠しきれない状況に追い込まれた。
- イ 自分が嘘をついていたことを、みんなに責められる状況になった。
- ウ 四人組以外の人にも、自分の気持ちを打ち明けざるをえなくなった。
- エ クラスのみんなに、三人と喧嘩しているところを見られてしまった。

問七

——線④「全部をおしまいにしてしまいたいという感情」とはどのような感情でしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 転校して、人間関係も自分の気持ちも整理したいという感情。
- イ 夏休み前の髪型にして、今までどおりの関係に戻りたいという感情。
- ウ 秘密を抱える苦しさから解放され、すっきりしたいという感情。
- エ 今後はウィッグを被らず、ありのままの自分でいたいという感情。

問八

——線⑤「言葉と言葉を不器用につなげながら、浅い呼吸を繰り返した」に見られるハルの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今日こそ嘘をついたことをコッシーに謝ろうと覚悟を決めている。
- イ コッシーの怒りになるべく触れないよう注意をはらっている。
- ウ どうしてもコッシーとうまくいかず、すっかり途方にくれている。
- エ 緊張しながらも、なんとかコッシーに気持ちを伝えようとしている。

問九 II の中に漢字一字を入れ、慣用表現を完成させなさい。

問十 — 線⑥「はつきり言って悪いの、あたしだし？」とありますが、コッシーは、自分の何が悪いと思ったのでしょうか。最も
適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誰にも言わないと約束したのに、セイラとカナに打ち明けたこと。

イ ハルが悩み、苦しんでいるのに、その気持ちに寄り添ってあげなかったこと。

ウ ハルに恥はじをかかせるために、わざとみんなの前で怒おこってみせたこと。

エ セイラとカナに、二人が仲直りできるようこっそり頼たのんだこと。

問十一 — 線⑦「だって、裏切られたって思ったもん」とありますが、コッシーはハルにどうしてほしかったのでしょうか。これより後の本文中のことばを利用して、十五字以内で答えなさい。

問十二 — 線⑧「強情な気持ち」とありますが、どのような気持ちでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みんなの前でウィッグの話をしたコッシーを許せないと思う気持ち。

イ あのとときウィッグを外したことは間違っていないかったという気持ち。

ウ みんなの前で自分に恥はじをかかせることを謝るべきだという気持ち。

エ コッシーに、自分の本当の気持ちなど分かるはずがないという気持ち。

問十三

——線⑨「今にも口から飛び出しそうになって、ハルは思わず口に手をやる」とありますが、このときのハルの気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 心にもないことを口走るくははしることによって二人の仲をこじらせたくない。
- イ 本音をおつけてコッシーを責め、つらい思いをさせたくはない。
- ウ これ以上、コッシーを怒らせてしまうようなことは言わないほうがいい。
- エ 自分がかわいくないことを認めると、コッシーに仲間はずれにされそうで怖い。

問十四

——線⑩「八十パーセントの甘い気持ちで、お腹の底に溜まるトロリとした苦々しさを薄めた」とありますが、この場面の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不満や言いたいことは数えきれないほどあるが、せっかくコッシーの機嫌げんも直ったので、本心を告げて二人の関係をこわしてしまうことはなんとしても避けたいと思った。
- イ 自分の気持ちを完全に理解してもらったわけではなく、モヤモヤした気持ちは残るが、今は、コッシーを親友として好きである気持ちや彼女との友情を大切にしたいと思った。
- ウ コッシーが「親友」であることを理由に、秘密を明かすよう強制することには納得なつとくできないが、それでも普段ふコッシーと楽しく過ごせているので、少しのことには目をつぶろうと自分に言い聞かせた。
- エ これからもウィッグを被り続けなくてはならないという現実は変わらないが、いつかは治ると言ってくれたコッシーのことをば励はげみにして、これからも暮らしていこうと思った。

問十五 —線⑩「このウィッグを被ったコッシーの姿を思い浮かべ、大きく頷いた」とありますが、このときのハルのコッシーに対する思いとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ウィッグに対する見方が大きく変わり、そのきっかけを与えてくれたコッシーの考え方に納得するとともに、やはり自分はコッシーのことが好きなのだと再確認している。

イ コッシーが新たなウィッグの使い方を提案してくれたことによって、ウィッグのことも、ウィッグを被った自分のも、ますます好きになれそうだと思うている。

ウ コッシーがウィッグを被った姿を想像し、秘密にしておきたいことがあるのは自分だけではないのだと思い、コッシーに共感し、二人の距離が近くなったように感じている。

エ コッシーがウィッグに対して好意的なイメージを持っていることを知り、おかげでコッシーに嫌われずにすんだことに、ひとまずほっとしている。

問十六 コッシーと話すうちに、ウィッグに対するハルの印象はどのようなものになったでしょうか。本文中のことばを利用して、「…もの。」に続くように、十五字以内で答えなさい。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

こんな質問があります。

「あなたの最初の収入で、何をしましたか」

その結果は、僕らの想像していないものでした。アンケートに答えたほとんどの元子ども兵が、最初の収入を誰かのために使っているのです。家族のために使うのはもちろんのこと、「隣に住むお母さんは、病気でお乳がでない。赤ん坊を育てるのに、苦勞している。だから、粉ミルクを買ってあげた」、「近隣のおじいちゃんが一人暮らしでかせぐことができず、ひもじい思いをしている。だから、お米を買ってあげた」など、誰かのために、自らの稼いだお金を使っていたのです。

僕だったら、苦勞したお金を、自分の欲求を満たすために使ってしまうそうです。彼ら彼女らは、自分の生活を豊かにしながらも、誰かのために「貢献」したいという心の持ち主でした。

それは、きっと過酷な体験の中でも、心の中にはあり続けたのでしよう。だからこそ、支援を一つのきっかけとして、それを思い出し、育んできたのです。

だからこそ、僕は思うのです。支援をする側が強い存在で、支援を受ける側が弱い存在ではない。人間なら誰にでも、問題に向きあう能力と、自分や人を大切にしようとする思いやりは、具わっている。支援(援助)とは、それらの能力や思いやりに基づき、育む一つの手段にしかすぎない。と。

(注3) 大槌復興刺し子プロジェクト。テラ・ルネッサンスに就職した職員が、被災地支援の中で出会った東京在住のボランティア四名と共に始めました。きっかけは、避難所で出会ったおばあちゃんたちの言葉だったそうです。

④「私たちには、ここで、やることがない」

メンバーのひとりから、「東北地方に根付く『刺し子』という技術をつかって、製品をつくってもらおう。ミシンも使わない、手縫いの仕事だから、避難所でも場所を取らないし、縫っている間は、集中しているから、心を落ち着かせることにもつながるはずだ」との提案があり、まずは、ふきん、コースターに手縫いでかめのデザインを縫ってもらおうところから、このプロジェクトはスタートしました。

発足から七年がたち、二〇一七年三月までに、のべ一八六名の大槌在住の女性たちに、約三〇〇〇万円を加工チンとして、お支払いすることができました。

大槌にある「大槌復興刺し子プロジェクト事務所」では、毎週二回、刺し子さん（刺し子製品を作る女性たち）が家で縫い上げてきた刺し子製品の検品と買取をもらうために集まります。あわせて、新しい商品の縫い方の講習会や、プロジェクトのこれからについても、意見交換も行います。

最高年齢八〇歳のおばあちゃんも、元気に通ってきます。大槌の元気な女性たちの声を聞くと、僕の心も 逆に、元気をもらうのです。

二〇一六年四月一四日。この日発生した熊本・大分地震では、甚大な被害を同地域にもたらしました。その様子をニュースで知った刺し子さんや、現地採用したスタッフさんたちは、誰に言われることもなく、募金箱を事務所にセッチ。熊本・大分

地震のための募金を始めたのです。

その行為に後押しをされて、僕らは、刺し子製品の(注6)一つ「くるみボタン」を寄付付商品として制作・販売することにし、刺し子さんの募金と合わせて、熊本の被災した子どもたちの学習支援のために、寄付することができました。

さらに、二〇一七年七月五日から六日にかけて発生した九州北部豪雨では、福岡県朝倉市、東峰村、大分県日田市を中心に、これまた大規模な被害をもたらしました。実は、僕の生まれ育った実家は、東峰村にあり、この豪雨によって全壊してしまいました。

家族は、すでに引越しをしていて、誰も住んでいなかったとは言え、一八歳まで過ごした家。思い出がまった家が、土砂によって押しつぶされた姿は、言葉にならないほど、ショックでした。

そんな時も、大槌復興刺し子プロジェクトに集う皆さんが、刺し子マルチクロスの売り上げを全額寄付することにして、一生懸命縫い上げ、販売。東峰村での災害ボランティア活動に寄付することができたのです。

彼女たちを支援していると思っていた僕が、今度は、彼女たちから支援される立場になった時、あらためて人間の「思いやり」の温かさに触れた気がします。そして、「思いやり」は場所や時間を超えて、人や地域の間をめぐるものだと気づけたのです。

誰かが誰かを思い、助け合うことが世界中に広がっていったら、きっと、地域や世界は、少しずつ良くなっていくと、確信したのは、大槌のおばあちゃんたちの心意気からでした。

今まで、出会ってきた元子ども兵、地雷の被害者、岩手・大槌の女性たち、そして、講演を聞いて、心を動かしてくれた人々。彼ら彼女たちが、僕らに教えてくれた、人間にとって大切なことが、二つあります。

⑥「すべての変化は、一人から始まる」

僕らの支援がきっかけになったとしても、課題を抱えた人々が、課題と向き合い、幸せな人生を送るためには、当事者である本人が、「問題とどのように向き合い」「その問題解決のために、自分をどのように変化させていくのか」と、自分で納得して、決めることが大切です。

外側から、その人のことを想って、アドバイスすることはできません。 **A**、自分や家族、地域が抱えている課題に

一生向き合っていくのは、当事者である本人です。その本人や地域が納得をして、その解決策を実行しようとしていくのが、問題解決の要であることを、これまでの支援の現場で、痛切に感じています。

「人は変わることができる。いつでも、いつからでも」

先ほど紹介した、東日本大震災時の元子ども兵の募金や、刺し子さんたちの他の災害地域の被災者支援など、どんな過酷な体験をしていても、その人の心の奥底には、「社会や他者のために役立ちたい（貢献したい）」「それによって、人や社会から必要とされていると実感したい」という思いが、必ずあるのです。 **B**、私たちの支援がきっかけとなったとはいえ、

自らの思い、そして学んだ技術や能力で、自らを変えていくことができたのです。

そのうえで、支援をする側にとって大切なことは、それら二つのことを、心から信じること。こちらが想定した通りに支援活動が順調に進まないことは、支援の現場においては、よくあります。そんな時、「すべての変化は、一人から始まる。だからこそ、自分が何を始めるのか」と、自分を出発点にして、何ができるのかを考えることです。

そして、「人は変わることができる。まだ、その変わるタイミングではないかもしれない」と、その人の本来持っている力と、未来を信じて、「今」を待つ勇気を持つことです。

信じること、C、信じるための勇気を持つこと。

それは、あなた自身に対してでも、同じことが言えます。一人からすべての変化は始まるとするならば、あなたの中にこそ、変化を起こす力があると言えるのです。そして、必ず、あなたも、あなたが心から望むものになる(変わる)ことができる、言えるのです。自分のことを、信じることから始めてください。

⑦ 自分を、自分が信じること。今は、自分(の可能性)なんて信じられないと思うかもしれませんが。僕も高校生のときはそうでした。けれども、そんなときは、いまでも自分の課題と向き合いながら、ひたむきに、少しずつ、変化を起こしている、この本で紹介した人々のことを、思い出してほしいのです。きっと、彼らも、あなたに言ってくれるはずです。

「あなたにも、できるよ」

「あなたにも、あなたと世界をよりよくできるんだ」

「私も、そうしてきたようにね」

(鬼丸昌也『平和をつくるを仕事にする』)

(注1) 子ども兵……軍隊に入っている一八歳未満の子ども。ここでは、カンボジアや、アフリカのコンゴ共和国で兵士にさせられた子どものこと。

(注2) 過酷……厳しすぎるさま。

(注3) 大槌復興刺し子プロジェクト……東日本大震災をきっかけに始まった取り組みで、岩手県大槌町に昔から伝わる「刺し子」を商品開発などに生かし、収入を得ることによって自立を支援している。「刺し子」は、布の上に糸で模様を作る伝統工芸のこと。

(注4) 検品……商品を出荷するときに、性能や品質などについて点検すること。

(注5) 甚大な……程度がひじょうに大きいさま。

(注6) くるみボタン……金属やプラスチックなどのボタンを布でくるんだもの。

(注7) 想定……ある条件や状況などを仮定しておくこと。

問五

——線③「支援（援助）」とありますが、「支援」に対する筆者の考え方として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間には、自分が置かれている状況に関わらず、「誰かのために何かをしたい」という心が本質的にあり、その心に従って行動を起こすものだ。

イ 人間は、生活に経済的なゆとりが生まれることによって他者を思いやり、問題を抱えている人々に何らかの手助けをしたいと考えるようになるものだ。

ウ 人間は、つらさや苦しみを味わうことによって思いやりの心や問題解決能力が育てられ、困っている人に手を差し伸べることができるようになるのだ。

エ 人間が生きたるためには、おたがいに協力し、助け合うことが必要なもので、自分が困っていたとしても、できる範囲で誰かを助ける責任があるのだ。

問六

——線④「私たちには、ここで、やることがない」の本文中における意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア やりがいや生きがいを感じられるようなことがない。

イ 職業を失ってしまったので、お金を稼ぐことができない。

ウ ここでは弱い立場なので、意見を主張する機会がない。

エ 足手まといになっあしでてしまっあしでるので、手伝えることがない。

問七

□に入ることはとして最も適当なものを次の中から選び、「楽しくてうきうきする」という意味の慣用表現を完成させなさい。

- ア せかされて
- イ ふくらんで
- ウ はずんで
- エ すみきって

問八

―線⑤『思いやり』は場所や時間を超えて、人や地域の間をめぐるものなのだ」とありますが、ここに見られる筆者の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人に親切にしていれば、いつか自分が困ったとき、今度はお返しとして、他人が自分に親切にしてくれるものだ。
- イ たとえどんなに離れていても、知らない人同士であっても、たがいに思いを届け合うことができるのだ。
- ウ ボランティア活動をすることによって、支援する意味と、他者の存在のありがたさに気づくものだ。
- エ たがいを思いやり、つねに助け合うことは、災害に遭^あった経験があるからこそ実行できるのだ。

問九

―線⑥「すべての変化は、一人から始まる」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一人ではできないが、多くの人が集まれば、どんな複雑な問題でも解決することができる。
- イ 個人として自立していれば、他人に流されることなく自分の道を見つけ、問題を解決することができる。
- ウ たった一人の勇気ある行動が、多くの人々の心^{こころ}を動かし、それが最終的には問題の解決につながる。
- エ 個人が問題に正面から向き合い、その解決に向けて行動することが、問題を解決するための第一歩となる。

問十

A

↳

C

に入ることはとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けれども

イ または

ウ そして

エ だから

オ つまり

問十一

——線⑦「自分を、自分が信じること」に見られる筆者の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の考え方や物事の見方を変えることで、世界は新たな一面を見せてくれるはずだ。

イ 自分が周りの人々や被災者たちにできるかぎりのことをして、世界を平和にするのだ。

ウ 自分が考え、行動を起こすことにより、世界をよりよく変えることはできるのだ。

エ 自分の行いが信念にもとづくものであれば、何をやっても間違いないのだ。